

新聞記事の「動詞」の韓一日翻訳ストラテジー —リーダビリティを重視した翻訳教育の観点から—

金 漢植

(韓国外国語大学)

The readability of a text depends largely on such factors as the lexical difficulty, the length of sentences, and the sentential structures. In addition, previous studies have revealed that the frequency of Sino-Korean or Sino-Japanese vocabulary used in a Korean or Japanese text also affects its readability. In this paper, a study of sample newspaper articles shows that Korean newspapers have used Chinese-derived words more frequently than their Japanese counterparts. In translating newspaper articles from Korean into Japanese, therefore, translators may need to make conscious efforts to increase the readability of a translation by selectively employing a strategy of translating the Sino-Korean vocabulary into pure and unique Japanese words.

1. はじめに

良い文章とは何か、と言った時、文章の目的や性格、読者の好みなどによって、「感動を与える文章」、「表現力の優れた文章」、「記憶に残るインパクトの強い文章」、「事実を正確に説明した文章」など、いろいろな答えが考えられる。これらの要因に加えリーダビリティ¹⁾、つまり、分かりやすく自然な文章という点も、文章を評価するうえで欠かせない重要な一因と言えよう。このことは、どんな言語や目的で書かれたどんなジャンルの文章であるかを問わず、文章全般について言えることであり、さらには、他の言語から翻訳された文章についても例外ではないはずである。本稿では、リーダビリティを左右する要因の一つである語種別の出現比率に注目して新聞記事の新聞社別比較、分野別比較、日韓比較をなど行い、その結果をもとに、韓一日翻訳²⁾のストラテジーについて考察していきたい。

KIM Han Sik, "Korean-into-Japanese Translation Strategy for Verbs in Newspaper Articles: In View of the Readability-Centered Translation Education." *Interpreting and Translation Studies*, No.8. pages 255-266. 2008. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

2. リーダビリティに関する先行研究

リーダビリティに関しては、主にアメリカを中心に、20世紀初め頃から多くの学者らにより本格的な研究が進められてきている。その結果、英語においては、リーダビリティを左右する代表的な要因として、単語の難易度、文の長さ(文当りの単語数)、文構造の複雑さなどが挙げられており、こうした考えに基づいて様々な「リーダビリティ公式³⁾」が開発されている。「リーダビリティ公式」とは、文章の分かりやすさを測定して数字で示したもので、何か絶対的に正しいものが一つあるのではなく、様々な公式がそれぞれの目的に応じて使われている。例えば、学校教科書や子ども向けの図書、新聞記事、各種の説明書などの文章が、読者にとってどれくらい分かりやすく書かれているか、または何歳ぐらいの人なら読めるかを判断する手段として利用されている。

一方、日本や韓国では、アメリカほどリーダビリティに関する研究やリーダビリティ公式の実用化が進んでいない。特に韓国では、韓国語のリーダビリティに関する研究や韓国語文章のリーダビリティ公式の開発よりは、英語のリーダビリティ公式を使用し英語教科書のリーダビリティを分析した研究が多数を占めている⁴⁾。韓国語のリーダビリティ公式の開発を試みたのは、イ・ソンヒ(1984)など、ごく少数にとどまっており、翻訳との関連でリーダビリティに注目した研究は見当たらない。

3. 研究の方法

前述のように、リーダビリティを左右する主な要因として、単語の難易度、文の長さ、文構造の複雑さ、などが考えられるが、これは英語に限らず、他の言語についても共通して言えることである。一方、日本語や韓国語の場合は、このような要因に加え、漢字の割合、漢語の割合、あるいは語種別使用比率なども重要な要因とされている(辰濃和男 1999、p.180、キム・ギジュン 1993、p.117)⁵⁾。

そこで本稿では、日韓両国の新聞記事を対象に動詞の表現に焦点を当て、漢語の割合、つまり、語種別出現比率をまず比較調査する⁶⁾。日韓両言語は共に、漢語、固有語、外来語、混種語の4つの語種から成るが、動詞だけを見た場合、混種語はほとんどありえない。「研究+する=연구(研究:yongu)+하다(hada)」など「動作性を持つ漢語名詞+する/하다(hada)」のような語の組み合わせが両言語に多いが、これらは漢語から派生した表現であるため混種語とはみなさず、漢語として取り扱う。また、新聞記事の動詞表現においては、外来語がごく一部に過ぎないため(クリックする、アクセスする、など。この点は、韓国語についてもほぼ同様のことが言える。)対象外とし、従って、漢語と固有語の2種に分類して出現比率の調査を行う。

調査の対象は、日本の『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』と韓国の『朝鮮日報』、『中央日報』、『東亜日報』の大手新聞3社ずつで、それぞれ政治、経済、社会面の3分野で記事の本文に使用された動詞の語種別出現比率(異なり語数ではな

く、延べ語数を基準に)を調査する。見出しにおいては、記事本文とかなり異なる表現法を使用することが多い(金 2001)ため、本稿では取り上げないことにする。

調査は、2007年8月から9月半ばにかけて、そして、2008年7月から8月にかけて、2次にわたって行い、各新聞社当たり約1000語ずつ、計約6000語について調べた。その結果に対する新聞社別比較、分野別比較、日韓比較などを行い、どのような特徴的傾向が見られるかについて考察した後、さらには、韓-日翻訳のストラテジーを示したい。

4. 結果と考察

以上のような方法で調査した結果、新聞社を上位カテゴリー、分野を下位カテゴリーとしてまとめると表1、表2のようになる。

表1〈新聞社別一分野別比較〉日本

(数字は出現語数と百分率)

		漢語	固有語
朝日	政治	120	226
	経済	104	225
	社会	93	239
	朝日計 1007	317 31.4%	690 68.6%
読売	政治	135	201
	経済	116	209
	社会	122	215
	読売計 998	373 37.4%	625 62.6%
毎日	政治	119	220
	経済	138	181
	社会	103	236
	毎日計 997	360 36.1%	637 63.9%
3 社合	3002	1050 35.0%	1952 65.0%

表2〈新聞社別一分野別比較〉韓国

		漢語	固有語
朝鮮	政治	144	168
	経済	154	187
	社会	185	160
	計 998	483 48.4%	515 51.6%
中央	政治	187	167

	経済	150		178	
	社会	142		173	
	計 997	479	48.0%	518	52.0%
東亜	政治	176		156	
	経済	158		180	
	社会	157		175	
	計 002	491	49.0%	511	51.0%
3 社合計	2997	1453	48.5%	1544	51.5%

日本の3社間の比較をすると、漢語比率がもっとも高い『読売新聞』(37.4%)と、もっとも低い『朝日新聞』(31.4%)との差は6.0%で、『毎日新聞』の36.1%は『読売新聞』に近い。一方、韓国では、『東亜日報』(49.0%)と『中央日報』(48.0%)との差が1%と、日本に比べると新聞社間の差ははるかに小さい。

日本の3社合計では、漢語動詞が35.0%、固有語(和語)の動詞が65.0%と、漢語・和語との出現比率に大きな格差が確認された。また、全ての品詞に関する語種別比率調査の結果(漢語54.85%、和語38.60%)(山口 n.d.)と比べると、漢語と和語の比率が逆転していることがわかる。

一方、韓国の3社合計は、漢語が48.5%、固有語が51.5%と、固有語の動詞の方が若干多用されており、日本と比較するとその比率にかなりの開きがある。全品詞の出現比率(漢語58.7%、固有語28.3%)(水野 1993)と比べると、動詞の漢語比率が全体より低いことが確認され、この点では日韓両言語が共通している。このことから、日韓共に、名詞の漢語比率は相対的に高く、動詞は比較的低いことが容易に推測できる。

次に、分野を上位カテゴリー、新聞社を下位カテゴリーとして調査結果をまとめると、次の表3、表4のようになる。

表3〈分野別—新聞社別比較〉日本

		漢語	固有語
政治	朝日	120	226
	読売	135	201
	毎日	119	220
	計 1021	374 36.6%	647 63.4%
経済	朝日	104	225
	読売	116	209
	毎日	138	181
	計 973	358 36.8%	615 63.2%
社会	朝日	93	239
	読売	122	215

	毎日	103	236
	計 1008	318 31.5%	690 68.5%
3 社合計	3002	1050 35.0%	1952 65.0%

表 4 〈分野別－新聞社別比較〉韓国

		漢語	固有語
政治	朝鮮	144	168
	中央	187	167
	東亜	176	156
	計 998	507 50.8%	491 49.2%
経済	朝鮮	154	187
	中央	150	178
	東亜	158	180
	計 1007	462 45.9%	545 54.1%
社会	朝鮮	185	160
	中央	142	173
	東亜	157	175
	計 992	484 48.8%	508 51.2%
3 社合計	2997	1453 48.5%	1544 51.5%

日本の場合、経済面で漢語動詞の使用がもっとも多く(36.8%)、もっとも少ない社会面(31.5%)との差は 5.1%となっている。一方、韓国の方は政治面の漢語使用が最多で 50.8%、経済面が最少で 45.9%、その差は 4.9%である。最多と最少の格差は日韓がほぼ同程度だが、経済面が日本では最多、韓国では最少となっているのが対照的である。

その理由は複雑多岐にわたるため明確に指摘することは難しいが、例えば、次のような一面がある。経済関連では、何かの価格変動や値動きに関する報道が多い。そういう場合、日常会話なら通常「(物価が)上がる」「(価格が)下がる」などと表現するが、新聞記事ではそれよりも「上昇する」「下落する」など、漢語動詞が比較的多く用いられている。一方、韓国の方では、「上昇(=상승)하다:sangsung-hada」「下落(=하락)하다:harak-hada」などの漢語動詞だけでなく、「오르다:oruda」「내리다:nerida」など固有語動詞もかなり使用されており、こうした点が以上のような結果となった一因と言える。

仮に、ある二つの文章の漢語動詞の使用比率の差が 5%ほどだとしたら、一般の読者がその違いに気づきながら読むことはないだろうが、日韓の格差は 13.5% (35.0% : 48.5%)におよんでいる。そのため、普段、漢語動詞が 35.0%ぐらいの文章を読みなれ

ている日本の読者が、もし 48.5%の文章を読んだ時は、どことなく違和感を感じるものが予想され、それはリーダビリティの低下につながる。

35.0%に比べ 48.5%は 3 割以上高い比率だが、世の中の様々な状態や事象において 3 割の差は決して小さいものではなく、柴崎・沢井 (2008)らも、漢語(と平仮名)の割合は日本語のリーダビリティの強い説明変数であるとしている。

韓一日翻訳を行う際、特に初級者はこのような点に関する意識が薄く、韓国語の漢語動詞をだいたいそのまま日本語の漢語動詞に訳す結果となり、全体としてあまり読みやすい文章にならないことが多い。

5. 韓一日翻訳の実際とストラテジー

一般に子どもは、「作成する」、「食事する」、「観戦する」、などの漢語動詞よりは、「作る」、「食べる」、「観る」、などの和語動詞から先に覚える。すべての動詞がそうとは言えないが、平均的に和語動詞の方が分かりやすく、リーダビリティが高いということになる。

韓国語でも同様のことが言えて、「作成(=작성)하다 : chaksung-hada」、「食事(=식사)하다 : siksa-hada」、「観戦(=관전)하다 : kwanjeun-hada」、などの漢語の方が、「만들다(作る) : mandeulda」、「먹다(食べる) : muckda」、「보다(見る) : poda」、などの固有語の動詞よりも語の難易度が高い。

この点と 4 章での分析結果に注目し、韓国の手新聞社(朝鮮、中央、東亜)で運営している日本語サイトで実際に翻訳・掲載されている実例を調べてみた。3 社とも、7-8 年前から韓国語の記事を日本語に翻訳してホームページに掲載しており、その翻訳は高いレベルを誇る翻訳者らによって行われている。ネイティブチェックも行われ、翻訳の完成度は高いが、時間的な制約などもあることから、やはり完璧とは言えない部分がある。

以下に示した例は、決して間違ではないが、さほど自然な表現とは言えないため、翻訳上の工夫が求められるものである(先に、実際に翻訳・掲載された表現をそのまま示し、下に修正案を示す。適切な翻訳の実例とは言えないため、新聞社名・日付は明記しないことにする)。

- ・ソウル高裁刑事 6 部は 11 日億台の賭けゴルフをした容疑で 1 審無罪が宣告されたソン某氏(53)に対する抗訴審で懲役 8 カ月を宣告した。

→ 言い渡した。

ベテランの韓一日翻訳者でも、韓国語と同じ漢語表現が日本語にもある場合は、無意識のうちに直訳⁷⁾をする傾向がある。「宣告する」という表現がもちろん日本語にもあるが、実際に日本の新聞記事で、ある判決の結果を報道する時などに使用するの

は通常「言い渡す」である。従って、この文でも、「言い渡した」と訳したほうがより適切で、違和感を感じさせない。

- ・～新しい政治を標榜する党が…

→ 目指す

韓国語を直訳した感じがして、リーダビリティを低下させる。日本語としてはだいぶ硬い表現であるため、文脈しだいでは直訳しないほうが望ましい。

- ・ノ大統領は、検察の捜査に圧力を行使するような発言をして…

→ 圧力をかける

韓国語では「압력(amneogul、圧力を)」の後は「행사하다(hengsa-hada、行使する)」がセットのように使われることが多いが、日本語でのこの表現はあまり自然とは言えない。

- ・～事実と異なる情報を国民に流したという疑惑が提起されている。

→ 疑惑が持たれている。

これも完全な直訳で、韓国語の漢語表現をそのまま機械的に訳したような例と言える。日本語では、「疑惑が」に後続する動詞は「持たれる」が圧倒的に多く、それが自然な表現である。

- ・KBS 理事会は 13 日に会議を開催し、後任となる社長の選任方法と手続き問題を議論する。

→ 開き/話し合う

下線部の二つの動詞は、両方とも表現そのものに問題はないが、バランスを考えて「開き」、「話し合う」、どちらか1か所だけでも和語動詞を使いたいところである。

- ・（北朝鮮で）人権蹂躪はまだ存在し、継続している。北朝鮮指導者は…

→ 続いている

韓国語の固有語の動詞には「続く」に対応する表現がないため、漢語で「계속되다(kesok-teda、継続される)」「계속하다(kesok-hada、継続する)」と言うしかないが、この表現を直訳して適切な場合もあれば、この例のように不適切な場合も多い。

- ・青瓦台は祝辞で提示された李大統領の国政課題を实践するため、来月中にも“100大プロジェクト”を確定、発表する。

→ 示された(示した、掲げた)/まとめ

ひとつのセンテンスの中に4つの動詞が出てくるが、すべて漢語で、文全体が硬すぎる。最後の「発表する」は言い換えが難しいが、「提示された」「確定」の部分は上のように和語動詞を使った訳も可能だろう。

一方、以下のように、韓国語の原文では漢語だった動詞を、ところどころ適切な和語動詞に翻訳し、全体としてのバランスが取れている翻訳も見られる。ひとつの記事の中でこれほどの漢語→和語の翻訳があったということは、翻訳者が意図的にそのようなストラテジーを駆使したためと推測される。下線部分はその例で、もし直訳したら()の中の表現になる。

政府が先月に組んだ(編成した)4兆9000億ウォンの補正予算の中で、約1兆430億ウォンが道路や鉄道、地下鉄などの工事期間を短縮するために使われる(使用される)見込みだ。しかし、国家財政法は、財政のずさんな運営を防ぐために、△戦争または大規模な災害の発生、△大量失業や景気低迷など重大な変化の発生、△法に則って、国の支出が新たに生じたり増えた場合—の3つケースに、補正予選編成の事由を厳格に制限している。

道路建設の支援と鉄道・地下鉄の工事期間の短縮に使われる(使用される)補正予算は、△都市鉄道1050億ウォン△一般・広域鉄道2600億ウォン△道路建設と道路工事支援6780億ウォンなど計1兆430億ウォンに上る。

国土海洋部は今年、300億ウォンの補正予算を投入し、来年以後、投資余力が確保できれば、10年の開通を間に合わせる(開通を推進する)ことができると見込んでいる(展望している)が、補正予選を組む(編成する)ほど急がれる事案ではないという指摘が出ている。

(『東亜日報』日本語版 2008年7月25日 政治面)

以上、一部の例ではあるが、動詞の語種に着眼し、リーダビリティを意識して、韓一日翻訳のストラテジーについて考察してみた。これはあくまでも動詞の部分にフォーカスを合わせ、例文も少しのセンテンスしか示していないが、翻訳にあたっては常に全体を見逃してはいけないため、当然のこととして、例文中の同じ表現であっても、文脈や記事全体の流れしだいでは違った翻訳が適切な場合も多いはずである。

日本の新聞記事において、漢語動詞の出現比率が全体の3分の1ぐらいだからといって、韓一日の翻訳をする際にもその比率と正確に一致させることはできない。それはそもそも無理な話で、仮に可能だとしてもそこまでする必要はない。しかし、平均的な記事の文章に比べ漢語があまりにも多過ぎたのではリーダビリティの低下につながってしまうため、それは良い翻訳とは言えないだろう。

翻訳の実践を積み重ねながら、以上のような問題について意識するようになり、体験を通して自分なりのストラテジーを身につけていく翻訳者もいることだろう。おそらく、新聞社の日本語サイトで長年翻訳を続けている人たちには、ある程度そのよう

な意識があると思われる。しかし、将来翻訳家となることを目指し、通訳・翻訳関連の学部や大学院で勉強している学生たちは、まだ経験が浅く、この点に関する問題意識が薄い。よって、適当な時期にこうした問題に関心を持つよう教えることが、有効な教育の一方法と思われ、ハイレベルな翻訳を行うための近道となるだろう。

また、その際には、以上のような点に関して理論的に理解するだけでなく、理解したことを実際の翻訳で適用して試みる必要がある。そのための具体的な例として、

開催する：開く・催す、 調査する：調べる、 記載する：書く・書き込む・記す、
 推進する：進める、 実践・実施する：行う、 会合する：会う、 招待・招聘する：招く、
 発生する：起こる・生じる、 模索する：探る、 漏洩する：漏れる…

のように、漢語動詞と和語動詞の類義語のセットを示してあげれば、学生たちの「意識化」や「自覚」⁸⁾につながり、実際に韓一日翻訳をするうえで役立つはずである。

その教育の時期も重要な点であるが、大学生レベルではターゲットランゲージの文法や表現法など、より基礎的な部分に重点を置いて教育すべきであるため、このような高度な翻訳ストラテジーを教えるには早すぎるだろう。個人差はあるだろうが、少なくとも大学院生レベルで翻訳を専攻する学生に教えてはじめて効果のある内容と思われる。

6. まとめ

以上の調査を通じ、全体的に韓国の新聞記事における漢語動詞の出現比率が日本のそれに比べてずっと高いことが分かった。また、日本の新聞では漢語比率がもっとも高い新聞と、もっとも低い新聞との間に 6.0%の差があったが、韓国の新聞はその差がはるかに小さく、1%に過ぎなかった。分野別の比較では、日本の場合は、経済面で漢語動詞の使用がもっとも多く、もっとも少ない社会面との差は 5.1%だった。一方、韓国の方は政治面の漢語使用が最多、経済面が最少で、そこには 4.9%の差があった。最多—最少の格差は日韓がほぼ同じだが、経済面の漢語使用が日本では最多だった反面、韓国では最少で対照的である。

記事全体として、日本語の中の漢語比率が韓国よりもずっと低いため、韓一日翻訳を行うにあたり、漢語をそのまま直訳のように漢語に訳すと、日本語としてはかなり硬い感じがし、読みづらい文章になってしまう恐れがある。新聞記事の翻訳においては、文学作品などに比べ作家(筆者)の文体を尊重する必要性はあまりなく、韓国語の漢語動詞を和語動詞に訳したからといって問題になることはないだろう。

また、ある専門分野の学術論文などは、読者もその分野の知識を十分持っていることと予想されることから、難解な漢語表現を多用してもほとんど問題にならない。しかし、新聞は一部特定の読者を対象とするのではなく、広く一般の人にも理解しやすいように書くことが原則となっている。そのため、読者の立場に立って、できるだけ分かり

やすい文章を書くということ、新聞記事の翻訳ストラテジーの大前提に据えるべきではないだろうか。そのような意味で、他のジャンルの文章と新聞記事とでは、リーダビリティの一要因である語種の比率をめぐっても、異なる翻訳ストラテジーを採用すべきだと思われる。

韓一日翻訳の具体的なストラテジーとして、文脈上、直訳すると違和感を感じさせる動詞や、日本語としてはあまり使用頻度の高くない動詞などについては、ある程度意識的に漢語動詞を和語動詞に訳すよう心がけることが適切だと言える。また、このことを大学院生レベルの翻訳専攻の学生に教えることが、高度の翻訳ストラテジーの習得につながるだろう。

謝辞：本研究の基礎調査などのため積極的に協力してくれたチェ・ジョンア、東隆志、ユ・ウンジョンの3人に深く感謝する。

著者紹介：金漢植 (KIM Han Sik) 韓国外語大学通訳翻訳大学院韓日科副教授。日韓通訳・翻訳教育、日本語アクセント専攻。主な著書：『한일 통역과 번역 (韓日通訳と翻訳)』2003年 韓国文化社。連絡先：hskim@hufs.ac.kr

【註】

- 1) 広義のリーダビリティは、レジビリティ(*legibility*)、つまり、活字の大きさや活字体、文章全体のレイアウトなど、視覚的要素まで含めた‘読みやすさ’を意味するが、本稿では狭義にとらえ、表現面での‘分かりやすさ’のみを意味するものとする。
- 2) 本稿でいう‘韓一日翻訳’は、韓国語から日本語への翻訳を意味し、日本語から韓国語への翻訳は含まれない。
- 3) 代表的なものとして、Flesch RE Formula、Dale-Chall Formula、Cloze Procedure などがある(キム・ギジュン(1993)『리더빌리티: 읽기의 이론과 실제(リーダビリティ：読みの理論と実際)』イルジン社)。
- 4) イ・ジョンミン(2006)『실업계 영어 교과서의 소재와 이독도 분석 및 교과서에 대한 교사와 학생의 만족도 조사 (実業系英語教科書の素材とリーダビリティ分析および教科書に対する教師と生徒の満足度調査)』梨花女子大学修士論文、キム・グッジョン(2002)『영어이독성(Readability)분석 연구 : 중학교 1학년 영어 교과서를 중심으로 (英語のリーダビリティ分析研究：中学1年の英語教科書を中心に)』韓国教員大学修士論文、チャ・ギョンファン他(1996)「중학교 영어 교과서 Readability 측정 (中学校英語教科書のリーダビリティ測定)」『韓國教育問題研究所論文集』第11号：149-168頁など。

- 5) さらに、柴崎秀子・原信一郎(2007)は、日本語の文章の①1文の平均文字数、②1文の平均単語数、③文章に使われた文字種の割合、④文章に使われた語種の割合、⑤1文の平均情報量、⑥1文の文節の数で、当該文章の学年レベルを予測するための公式を作り、特許出願している。
(http://jstore.jst.go.jp/cgi-bin/prompt/detail.cgi?prompt_id=6350)
- 6) 名詞や形容動詞などにおいても、語種別使用比率がリーダビリティを左右すると考えられるが、多くの品詞を取り上げることでフォーカスがぼやけてしまう恐れがあり、別の研究課題とする。
- 7) 日韓両言語で共通して使われる漢語の部分はそのまま使用し、「する」の部分だけを「하다(hada)」に変えるような訳し方を、本稿では‘直訳’と称する。例えば、「표방(標榜)하다 → 標榜する」「조사(調査)하다 → 調査する」など。日本語と韓国語の間では、漢語の読みだけを変えれば、ほぼ同様の意味で使用できる語彙が非常に多い。
- 8) Kussmaul & Tirkkonen-Condit (1995)は、翻訳者が翻訳のプロセスに関する自覚を持っていれば、固定した表現など、ミスを減らすことができるだろうと指摘している(チョ・サンウン(2004)から再引用)。

【参考文献およびウェブサイト】

- 辰濃和男 (1999)『文章の書き方』岩波新書
- 水野俊平 (1993)『現代韓国語の語彙構成の計量的考察』全南大学修士論文
- 柴崎秀子・沢井康孝 (2008)「文章中の漢字と漢語の分析による日本語リーダビリティ公式構築のための基礎研究」[Online]
<http://celija.risc.cnrs.fr/programme/kango2008/CELIJA-handout-2007-11-10.pdf#search=>
(2008年11月22日)
- 山口昌也 (n.d.)「新聞記事における語彙の時間的変化分析－語種との関係を中心に－」
[Online] <http://www.kokken.go.jp/gairaigo/Report126/houkoku3-4.pdf#search='語種別比率'>
(2008年8月16日)
- 科学技術振興機構 研究成果展開総合データベース [Online]
http://jstore.jst.go.jp/cgi-bin/prompt/detail.cgi?prompt_id=6350 (2008年8月16日)
- イ・ソンヒ (1984)『문장 가독성 측정공식과 이를 통해 본 현대 매스컴 문장의 가독성 측정 조사연구 (文章可読性測定公式とこれを通じて見た現代マスコミ文章の可読性測定調査研究)』西江大学修士論文
- キム・ギジュン(1993)『리더빌리티 : 읽기의 이론과 실제 (リーダビリティ：読みの理論と実際)』イルジン社
- 金漢植 (2001)「한일 양국의 신문 헤드라인 표현과 그 번역 (韓日両国の新聞ヘッドラインの表現とその翻訳)」『通訳翻訳研究所論文集』第5号 51-68. 韓国外語大学通訳翻訳研究所

チョ・サンウン(2004)「일-한 번역과정 연구의 번역 교육 적용 (日-韓翻譯過程研究と翻訳教育への適用)」『国際会議通訳と翻訳』第6巻2号 151-167. 韓国国際会議通訳学会